

アメリカ・ユダヤ人の「平等」観と「るつぼ」 世俗的ユダヤ人大学の創設をめぐる議論から

北 美 幸

はじめに

1948年10月、マサチューセッツ州ウォルサム市にユダヤ人の支援による世俗的大学（Jewish-sponsored secular university）であるブランダイス大学が開学した。同大学は、ユダヤ教の宗教指導者であるラビの養成のための極めて小規模な大学を除く、アメリカ合衆国ではほぼ実質的に初めてのユダヤ人大学である。卓越した弁護士でありユダヤ人として初の連邦最高裁判事となったブランダイス（Louis D. Brandeis）の名を冠し、開学後わずか5年でニューイングランド大学協会からアクレディテーション（正式認可）を受けた、大学院博士課程までを持つ学術的にも極めてレベルの高い大学である。

当時の合衆国の高等教育は、第二次世界大戦中に制定された復員軍人援護法により進学希望者が急増し、急速な拡大・大衆化の過程にあった。この時期、ユダヤ人たちがニューヨーク州における州立大学の設立を望んでいたこと、1910年代から他の移民たちに先駆けて大学への進学を開始していたことなどを考えると、世俗的ユダヤ人大学は、ユダヤ人自らで大学を新設することにより大学新入生の収容人数を僅かであれ増やし、ユダヤ人学生が入学許可を得にくい状況を改善するという点において設立が切望されたことは想像に難くない。¹しかしながら、「書の民」ユダヤ人たちにとっても、実は世俗的ユダヤ人大学の設立を支持、支援することは当然のこと

ではなかったのである。

このことは、同時期に展開されたユダヤ人「割当制」(quota system＝大学当局の手による入学者数の割当制限制度)廃止運動の性格や方向性を想起すると理解しやすい。というのは、彼等が展開したのは、「割当制」が反ユダヤ的であることを指摘しその差別慣行を廃止しようという運動ではなく、「人種・宗教が考慮の対象とならない」入学選考を求める運動であった。すなわち、彼等の活動の根底にあったのは、肌の色や宗教の違いを一切ないものとみなす「カラー・ブラインド (color blind＝人種、肌の色等の違いに着目しない)」な思想であり、白人も黒人もユダヤ人も「アメリカ」人として溶け合う「るつぼ」社会であった。そうすると、このようなアメリカ社会統合のあり方を理想としていた当時のユダヤ人たちにとって、自らの大学を設立することは確かにその入学定員分の追加的な教育の機会の拡大に貢献する一方、「ユダヤ人の」高等教育機関として合衆国における集団としてのユダヤ人の存在をことさらアピールしてしまうものだったのである。

そこで本稿では、このようなジレンマにユダヤ人たちはどのように折り合いをつけようとしたのかという点に着目しながら、世俗的ユダヤ人大学設立に関する議論の歴史的展開を追うことにする。これまで、例えば合衆国におけるユダヤ学 (Jewish studies) の発展史研究として、ユダヤ人の文化的あるいは社会的上昇を目指して、19世紀頃からユダヤ教学やヘブライ語などの学問がハーバード大学やコロンビア大学といった既存の大学のプログラムの中にポジションを得ようとしてきたことについては研究されてきた。しかし、それらにおいては、ユダヤ学科の設置やユダヤ教関連科目の導入については考察されているものの、同様にユダヤ人の合衆国におけるシンボルにもなり得るはずのユダヤ人大学の設立については言及されていない。²また、大学史の立場からユダヤ人大学が取り上げられること

もあるが、そこでは、世俗的ユダヤ人大学はリベラル・アーツの大学から出発しその後大学院を付設するという、多くのプロテスタント系の大学と同じ道筋を歩んだとして、大学の発展のスタイルとしては他の大学との類似性や共通点があることが指摘されるにとどまっている。³

結論をやや先取りする形になるが、ブランダイス大学は、ユダヤ人のカラー・ブラインドな平等観と「割当制」への対抗意識から、ユダヤ人大学でありながら学生や教員はユダヤ人に限定せず、入学願書に人種や宗教を記載させる欄も設けない「非割当」の大学としてスタートしたのであった。本稿では、こういった社会史・人種関係論的視点から世俗的ユダヤ人大学の設立を論じ、ユダヤ人たちが「カラー・ブラインドの理想」をどのような形で実現しようとしたのかを明らかにしたい。

1. 合衆国におけるユダヤ系高等教育機関の歴史的展開

1636年にハーバード大学がキリスト教会衆派の、そして合衆国最初の大学として開学されて以来、イエール大学やコロンビア大学など多くの私立大学が様々なプロテスタントの宗派により設立された。またカトリックに関しても、ジョージタウン大学が1789年に設立されたのをはじめとして現在では全国で200以上の大学が存在している。このように、合衆国においては、宗教あるいは宗派を設立母体とした大学、あるいは、設立母体は宗教や宗派でありながらもその後世俗化した大学が相当数存在している。その状況からすれば、ユダヤ人も高等教育機関を自前で設立しようという発想を逸早くしていたとしてもおかしくはなかったのだが、彼等が設けた大学は、20世紀に至ってもラビの養成を目的とした小規模なものが中心であった。

合衆国におけるユダヤ系の高等教育機関の設立は、長い間、様々な形をとってその構想が現れはしたが、なかなか実現しなかった経緯がある。む

ろんそのことには、1880年代に至るまで合衆国に居住するユダヤ人は人口の絶対数が少なく、しかもその大部分を戒律の緩やかな改革派ユダヤ教を信奉するドイツ系が占めていたという事情もあるだろう。19世紀中葉には、外交官でありジャーナリストであったノア（Mordecai M. Noah）という人物が、ユダヤ人の青少年がヘブライ語と古典を学ぶことのできる学校を設立することを提案し、また1849年にリーザー（Isaac Leeser）ラビが、自ら設立したフィラデルフィア・ヘブライ人教育協会（Hebrew Education Society of Philadelphia）を文理学部のある大学へと拡大発展させようと試みたことがあった。しかし、これらの計画は実現することはなかった。また、同じフィラデルフィアでは1867年にマイモニデス大学が設立されたのだが、この学校は1873年までしか続かなかった。⁴

その後、1875年にヘブラー・ユニオン・カレッジがオハイオ州に、1887年にジューイッシュ・セオロジカル・セミナリー・オブ・アメリカがニューヨーク州に創設され、それぞれ改革派ユダヤ教、保守派ユダヤ教のラビ養成機関として現在まで残る大学となった。その他、ユダヤ学やヘブライ語の教師を養成する大学としては、1897年にグラッツ・カレッジ・イン・フィラデルフィア、1919年にボルティモア・ヘブラー・カレッジ、1921年にヘブラー・ティーチャーズ・カレッジ・オブ・ボストンなどが設立されている。⁵

また、必ずしもユダヤ教関連の職業につくための訓練所でない大学も設立された。1886年の設立当初、ユダヤ教の律法を学ぶタルムード学校であり、東欧からの移民の子弟を対象とした初等学校であったニューヨーク市のイエシバ大学は、幾度かの組織再編を経て、1928年に教養教育（リベラル・アーツ）の部門を持つ世俗的の大学となった。しかし、4年後の最初の卒業生19名のうち10名はラビになり、やはり聖職者養成学校の域を出ないものであった。そして、その後に大学院、医学部などが整備された際も、

それは「ユダヤ系の人びとがユダヤ的なもの（Jewishness）を失うことなく全ての職業、専門職に入っていくことを企図」⁶したものであり、ユダヤ教の教義に厳格に従う正統派ユダヤ教の色彩を色濃く残したものとなった。また、フィラデルフィアに1907年に設立されたドロブシー大学は信条や人種に関わりなく学生や教員を受け入れるとしていたが、提供されたカリキュラムは大学院レベルのユダヤ教学のみであった。⁷このように、これら聖職者の職業訓練所以外の大学も、宗教としてのユダヤ教を離れることはなかったのであった。

これに対し、医師を目指すユダヤ人の若者が直面する差別は年を追うごとに厳しくなっていったため、ユダヤ人が全部あるいは大部分の資金を提供するメディカル・スクールを設立しようという別の方面での動きも生まれた。1940年には、それぞれ著名なニューヨークの弁護士であるスチューワー（Max D. Steuer）と内科医のラスキン（Simon L. Ruskin）が、ゴーガス医療科学協会（Gorgas Institute of Medical Sciences）を組織してこの運動の先頭に立ったのだが、ニューヨーク州大学評議会からの大学設立認可を得ることはできなかった。また1941年からは、ニュージャージー州ニューアークにメディカル・スクールを設立しようとの活動も見られたが、医学博士号を授与する権限を州評議員会から得ることができず、この計画も頓挫していた。⁸

以上のように、第二次世界大戦が終結しても、合衆国においてはユダヤ人の高等教育機関は事実上ラビの養成を目的とした小規模なものに留まっていた。よって、ユダヤ人たちは既存の公立の大学へ、あるいは「割当制」による入学制限を潜り抜けて私立の大学へと進学していたのであった。しかし、差別に対抗して独自の高等教育機関を設立しようという動きはメディカル・スクールに限定されたものではなかったため、ユダヤ人が既存の高等教育機関に入学を許可されることがいかに困難であるかが指摘さ

れ、ユダヤ人差別に対する非難の声が高まった時期には、同時にユダヤ人大学設立の議論も高まりを見せた。すなわち、1922年6月からの数ヶ月間、ハーバード大学における「割当制」実施の疑いが全国的な議論となった頃、そして、第二次世界大戦後にダートマス大学その他における「割当制」の存在が指摘されユダヤ人諸団体による本格的な「割当制」攻撃が始まった頃の二度に渡る。⁹以上の状況を踏まえ、次節ではまず、1920年代前半における世俗的ユダヤ人設立の議論について検討する。

2. 1920年代のユダヤ人大学設立議論

(1) 「割当制」始動以前のユダヤ人大学論

スタンレー・ホールの演説を手がかりに

世俗的ユダヤ人大学の設立が初めて本格的に主張されたのは1920年代であったが、1917年にもクラーク大学のホール(G. Stanley Hall)学長が「ユダヤ人大学への提案」と題する演説を行っていることが確認される。ここでは、ユダヤ人学生に対する差別の問題が議論される以前のユダヤ人大学に対する見方の一つとして、この演説の内容をみてみたい。ホールはユダヤ人ではないが、米国心理学会の初代会長をも務め、教育心理学の草分け的存在のリベラルな教育者として高名であった。そこでは、ユダヤ人大学は「ユダヤ文化の最もよい部分を表現することのできる中心的な高等教育の機関」¹⁰として描かれている。それは例えば以下のような部分にあらわれている。

...既存の大学に多数の教員がいる強力なユダヤ学科でも事足りるし、他の偉大なアカデミーのような学問的なアカデミーでもユダヤ教学の発展には役に立つだろう。しかし、それでも壮大な計画に則ってうまく設置され、組織されたユダヤ人大学の方がより好ましいと私は思うのである。

...同化は多くの点のある程度までについて、偉大に必要な善なのであるが、それも程度が過ぎると、何かが失われる危険がある。そこで、私はユダヤ人学生はすべての種類の大学に在籍させる一方、自分達用のものも提供したいと思う。

...この国は、私が思い描いている偉大な大学 全ての部門においてユダヤ文化を進歩させる大学 が設立されるべき場所なのである。私は、ワシントンのカトリック大学がたった25年でもたらした文化的な効果に深く感動しているのだが、それは、カトリシズムに高い文化的逸話を付け加え、直接的に、あるいは恐らく間接的にもカトリック教会の伝統を現代の西洋文化として引き立てるのに大いに役立ってきた。

...もし、私が信じているとおりにユダヤ人大学が興隆を極めれば、あなた方の大学のひとつの機能はユダヤ人のためのリーダーや、他の偉大な学習機関にいるユダヤ人学生を見守り導く者を育てることになるだろう。

...私が思い描くユダヤ人大学は新しい預言者の学校になるであろう。(中略)まさに今年が、これから続く何十年あるいは世代にわたって成長し、過去と未来にわたってユダヤ人種の記念塔であり、学びの宝庫であり、また高遠な精神の保管所となるこのような偉大な機関のはじまりの年となるべきである。¹¹

この演説は具体的なユダヤ人大学設立の構想や計画があった上でのものではなかったから、ホールの意見が当時のユダヤ人大学観をどの程度代表するものであったのかを正確にはかることはできない。この時期にはまだ、ユダヤ人学生の入学制限の問題は公の議論になっていなかったため、彼のユダヤ人大学に対する考えは、同化主義との関連、ユダヤ人指導者の養成などのあらゆる面において、純粋に肯定的なものであった。彼は、ユダヤ

人が「隔離 (segregation)」との非難を受けることなく独自の文化的伝統を保持するために集まることができるところとしてユダヤ人大学を思い描いていた。

以上のようなポジティブなユダヤ人大学観、また1910年代末にはユダヤ人の大学進学熱が高まりつつあったことに鑑みれば、資金その他の条件を整えば、ユダヤ人大学の設立までの道のりは近いように思われた。しかし、実際は、1920年代に入って、ユダヤ人の大学進学希望者の数はますます増加したにもかかわらず、ユダヤ人大学の設立はむしろ遠のいた。その様子を以下、見ていくこととする。

(2) ニューマン・ラビのユダヤ人大学論

1922年6月、ハーバード大学が新入生受け入れ方針の変更を発表したところ、それがユダヤ人に対して差別的であるとの議論が起こり、その後数ヶ月に渡りさまざまな新聞や雑誌で取り上げられた。その際、ラビ養成を主目的とした大学ではない世俗的ユダヤ人大学の設立の必要性を訴えたのが、ニューヨークのラビ、ニューマン (Louis I. Newman) であった。本項ではまず、同年10月27日号の『ジューイッシュ・トリビューン』に掲載された「アメリカにおけるユダヤ人大学は望ましいか？」と題する彼の論説の内容を概観することとしたい。

...15年前、アメリカにおけるユダヤ人大学は、事実上想像できないものであった。大学にいるユダヤ人は、数の上でも影響力の上でも問題にならなかったのである。しかしこの10年、特に世界大戦以来、状況は根本的に変わった。非ユダヤ人の民族や組織は、ユダヤ人の存在に過敏になっている。非ユダヤ人の大学はユダヤ人学生を非難の目で見られるようになってきている。¹²

ニューマンのユダヤ人大学論は、その冒頭からユダヤ人学生への敵意が

アメリカ・ユダヤ人の「平等」観と「るつぼ」 世俗的ユダヤ人大学の創設をめぐる議論から

年々増大しつつあることに触れるものであった。そして彼は、ハーバード大学での議論、およびニューヨーク市のメディカル・スクールがその門戸をユダヤ人に対して閉ざしつつあることに触れ、その影響はユダヤ人にとって差し迫った危険であると述べている。

国で最も偉大な私立大学でさえ、地理的配分やその他の巧妙に操作することのできるテストといった手段によりユダヤ人学生の数を首尾よく制限している。(中略)もしユダヤ人が大学の入学許可を得るためのたたかいに敗れたら、それはより重大なたたかいに敗れたことになるのだ、すなわち、高度な次元の専門的職業や商業に参入する権利を失うのだ。¹⁴

ユダヤ人学生がこのような苦境にあるのは、彼等が大学において目立つ存在であり、有能であるゆえであった。しかしそれ以上に、ユダヤ人に対する嫌悪そのものが強いことが問題なのであった。

もし我々が十分な寄付金を納めることができなければ、恩知らずだと非難される。もし卒業生としての寄付が気前の良いものであれば、母校の財政と方針に「ユダヤ人コントロール」を確立しようとしているとして恐れられるのだ。(中略)我々は、何かをすれば非難されるし、しなければ非難される。何かしようとするれば非難されるし、しようしなければ非難されるのだ。¹⁵

当時、「割当制」によりユダヤ人入学者数を制限する場合でも、「大学にとっては、彼等の寛大さを示すために少数のユダヤ人が必要」¹⁶であるので、各大学はユダヤ人を完全には排除せず、裕福なユダヤ人の息子や娘の入学は許可していた。あるいは、ユダヤ人学生を制限している私立大学を避け、公立大学に進学すればよいという考えもユダヤ人の間には根強くあった。実際、例えばニューヨーク市立大学では、1919年時点で学生の80%から90%をユダヤ人が占めるというような事態が発生していた。¹⁷これに対し、

ニューマンは「政治家のグループが、学生のほとんどがユダヤ人である学校に州や市の金を使うことに腹を立て始めたらどうなるかを考えてみると良い」¹⁸と述べる。そして、他国でのユダヤ人大学の例を引き出して、合衆国におけるユダヤ人大学創設の議論を切り出したのであった。

ディアスポラの状態においてもユダヤ人大学は目新しいものではない。中世には、南フランスでは非ユダヤ人の学生も在籍した偉大な医学校を誇っていたのだ。アメリカと20世紀のユダヤ人の関係は、ユダヤ人のルネッサンスの中心地であるラングドックと13世紀のユダヤ人の関係と同じである。それであるなら、アメリカの土地に存するユダヤ人の大学が怪物や脅威になることがあるうか。¹⁹

具体的な構想は以下のようなものであった。「アメリカのユダヤ人は不相応な財政的負担なしに程度の高い機関を設立し、維持するに十分な資金を持っているから」²⁰財源は原則的にユダヤ人の寄付や出資金でまかなう。また、カリキュラムは、「普遍的」でリベラルであり、一般教養、人文科学、専門教育科目を擁する。ユダヤ教のコースも提供されるが、神学科目と世俗科目は厳格に分離させ、学生を「ユダヤ化 (Judaize)」するためのものとはしない。²¹

教員は必ずしもユダヤ人である必要はないとされた。しかしニューマンは、「ユダヤの知性の断片が大学の教員に凝縮されていれば、それは必ずや刺激的」²²であり、海外からの客員教員としてフロイト、アインシュタイン、ベルクソンなどの名前をあげ、これらユダヤ人教員を迎えることができれば「我々の大学のスタッフは世界中の羨望的であり、ユダヤ人の誇り」²³となるであろうと述べている。

また、学生集団についても「我々が大学をつくらうとしているのは部族的になることを望むからではない」²⁴とされ、非ユダヤ人の学生も受け入れることが想定された。

学生集団は最も興味深い新大学の特徴となるであろう。我々は、人種、肌の色、宗教の制限なく幅広く戸を開き、私立大学をアメリカの平等の擁護者という本来の位置に戻すことを目指す。しかし、「外国風の」アクセントや外見、立ち居振る舞いのために他の大学から入学を拒否された者の避難所あるいは機会になるのであるから、大部分の学生はユダヤ人になるであろう。

…我々のモットーは自助と自己解放でなければならない。我々は、優秀さとアメリカニズムをユダヤ人大学を通じて達成することができる。それは、シナゴークや若者向けのサマーキャンプ、ユダヤ人の私立学校や大学、その他すべてのユダヤ人が個人あるいは集団として自己表現しようとしているメディアを通じて達成するのと同じである。私は、どうしたら「紳士」になれるかを非ユダヤ人のところに学びに行く必要はないと信じている誇り高きユダヤ人の一人である。我々は救済とパワーを完全に達成することができるので、非ユダヤ人の方から我々のところに来るであろう。²⁵（下線部引用者）

以上のように、「大学における反ユダヤ主義への解決策としてではなく、ユダヤ人の知性と理想のアメリカン・ライフへの貢献として」²⁶提案しつつも、ニューマンのユダヤ人大学論は、やはり学生の多くがユダヤ人になるであろうことを想定していた。論説は、現在のユダヤ人学生への差別を取り除くことを訴えて締めくくられている。

我々はユダヤ人大学の創設を提唱しているのであるが、それと同時に、心から、非ユダヤ人と偏見を持った非ユダヤ人に、彼等自身そして国の利益に反している差別方針を取り除くことを呼びかけたい。移民の制限、教員や教授の言論の自由の妨害、クー・クラックス・クランの急成長などは、アメリカが悪事を働いてその何倍もひどい目にあう予兆なのである。²⁷

(3) ユダヤ人大学設立構想への賛否

るつぼとしての〈アメリカ〉への期待

ニューマンのユダヤ人大学論は『ジューイッシュ・トリビューン』の編集者により大学教員やユダヤ人あるいは非ユダヤ人の著名人らに送られ、多くのコメントを得た。また彼は、例えば1922年12月3日にワシントン・ハイツで行われたフリー・シナゴグ・オープン・フォーラムで演説を行うなど、この時期、他の場面においてもユダヤ人大学の設立を訴えた。²⁸

ニューマンの議論はかなり否定的に受け入れられた。むろん、ただ単に反対意見として「ユダヤ人大学は問題全体の解決にはならない」²⁹あるいは「アメリカにおけるユダヤ人大学は全面的に好ましくない」³⁰としかコメントされていないものもあるので、賛成、反対の新聞記事の数を量的に比較することによって、当時のユダヤ人大学設立への賛否を議論することは適切ではないだろう。本項では、「アメリカ」、「アメリカニズム」、るつぼ、人種の境界線といった言葉に注目し、ユダヤ人大学の設立を巡って展開された当時の人々のアメリカ社会の統合のあり方に対する考えを探りたい。

ニューマンのユダヤ人大学論が掲載された同じ号の『ジューイッシュ・トリビューン』において、同誌論説委員はユダヤ人大学の設立に異を唱えるコメントを掲載している。それは、「彼が描いたユダヤ人大学は実現可能なものであろうし、いったん組織されれば、間もなくそれは我々の高等教育の最前線に立つものになるだろう」³¹と述べ、さらに、私立大学で行われているユダヤ人学生に対する入学差別を批判しつつも、ユダヤ人独自の大学の設立というアイデアには難色を示していた。

しかし、これはユダヤ人の問題ではないのである。これはアメリカの問題なのである。学業以外に基づいて大学への入学を拒否したり制限したりすることは健全な教育の原則に反するだけでなく、アメリカの

フェアプレイの観念や機会の平等というアメリカの基本的な政治的信条にも反するのである。我々の制限主義者とのいざこざは、彼等が反ユダヤだということではない。彼等は反アメリカ的（un-American）なのだ。（中略）アメリカにユダヤ人大学をつくるということは解決ではない。それは降伏である。それは、我々のアメリカニズムに対する妥協である。（中略）それは、それまでゲッターがなかった学びの場にゲッターを作ることになるであろう。³²（下線部引用者）

ニューマンのユダヤ人大学設立論に対する賛否は、設備や資金に関することではなく、上記に見られる「ゲッターを作ること」、言い換えれば、合衆国内でユダヤ人が集団として確立、場合によっては孤立することに集中した。それらの「集団としてのユダヤ人のあり方」観を整理すると、以下に抜粋するような主張が見られる。

「私はそれがいかなる理由 社会的なものであれ、宗教的なものであれ、人種的なものであれ、人類の分裂（division）を深く嘆き悲しんでいる。」³³

「私の個人的な判断は、人種の境界線に基づきたいかなる大学にも反対するものである。それゆえ、私の個人的な見方では、ユダヤ人大学にも、他の人種的な提案にそうするのと同じように反対なのである。」³⁴

「この国において、人種や宗教のラインにそって教育の場で区別（differentiation）をすることは間違いであり、その間違いは我々の民主主義にとって重大な結果をもたらすことが考えられる。」³⁵

「私が思い描いている300万人のアメリカのユダヤ人がつくる大学とは、信条にかかわりのない人間の慈愛の記念碑となるべきである。そして、私の判断では、ユダヤ人の援助によるそのような大学がもし創設されたなら、それは賞賛に値する記念碑になるであろうし、ローマ・カトリック、長老派、バプテスト派、メソジスト派、監督派の似たよ

うな大学に良い意味で匹敵するものになるであろう。」³⁶

「彼等の多くは、それが既にある反ユダヤ主義を悪化させ、階級と信仰の多様さを永続化させるような隔離状態を作り出すことを恐れているのだ。私には、それはばかばかしいことに思える。というのは、それが人種や肌の色、信条にかかわらずあらゆるセクトに開かれたものになれば、隔離の類のものでないことは確かであるからである。」³⁷

(下線部はすべて引用者)

これらは、1922年11月から12月にかけての『ジューイッシュ・トリビューン』や『ニューヨーク・タイムズ』などに掲載された新聞記事で、前三者が大学設立に反対(Opinions Opposed)、後二者が賛成(Opinions in Favor)である。これらを見て気づくように、大学の設立に賛成・反対のいずれも、直接的に「るつぼ」が望ましいというような表現は使用しないものの、グループの特色や境界線を明確にする文化多元主義的な発想には反対の立場を表明している。すなわち、ユダヤ人大学の設立に反対する意見は人種の分裂、境界線、ラインに反対しているのであり、賛成の意見は、ニューマンが非ユダヤ人も人種や宗教にかかわらず学生や教員として受け入れると構想している点において賛成しているのである。その意味では、ユダヤ人大学に賛成であれ反対であれ、「平等」や統合のモデルのあり方に関しては、同じものを理想としているといえる。

ところで、興味深いことに、合衆国におけるシオニスト運動に対する賛否とユダヤ人大学の創設に対する賛否は連動していた。例えば、1922年12月10日の『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載されたリッチ(Stephen G. Rich)による寄稿文は、「ニューマン・ラビによってなされたユダヤ人大学の提案は、この25年間のシオニストによる非アメリカ的行動の論理的最高点である」と述べ、ユダヤ人大学は「必要なく、ユダヤ人とアメリカ人にとって有害である。根本的な誤解に基づいた考えである」³⁸と断じてい

る。しかし、創設賛成派は逆に、

シオニスト運動も、以前は、まさに同じ理由で反シオニストの「最良の精神 (best minds)」によって異を唱えられていたのである。彼等は、パレスチナにユダヤ人のホームや国家を建設することは、離散状態で住んでいる国家におけるユダヤ人の平等な権利のためのたたかいを放棄することを意味するのだと主張していたのだ。そこでシオニスト達は、ユダヤ人は抑圧のあるすべての国の個人やマイノリティ・グループに対する人道にかなった民主主義的な扱いのためにたたかうことにより人類社会のために奉仕するのだと抗弁したのだ。³⁹

として、シオニズムに普遍的な人道主義、民主主義が存すると主張することによってユダヤ人大学の創設とシオニズムの両方を支持する発言をしているのである。

というのは、1897年にヘルツェル (Theodor Herzl) がスイスのバーゼルで第一回シオニスト会議を開催しユダヤ人国家の建設を目指す政治運動としてシオニスト運動を確立すると、翌1898年には合衆国においてもアメリカ・シオニスト連盟 (The Federation of American Zionists) が結成され全国規模でシオニスト運動が組織化されたのだが、この組織は合衆国のユダヤ人の意向を代表するというには程遠い状態だったのである。⁴⁰シオニスト運動は、居住国家への忠誠心が強く同化程度の高いユダヤ人の中で忌避・非難される傾向があり、例えば改革派ラビの組織であるアメリカ・ラビ中央評議会 (The Central Conference of American Rabbis) は、その1897年の年次大会において「ユダヤ人国家を建設しようとするいかなる試みにも反対する」、「ユダヤ教は政治的なものでもナショナルなものでもなく、精神的なもの」とする決議を採択していた。また20世紀に入ってからは、アメリカ・ユダヤ人委員会 (American Jewish Committee) も「我々はもはや自らをネーションとはみなさない。我々は宗教共同体である...それゆ

えパレスチナへの帰還も…ユダヤ人国家に関するいかなる法の再生にも期待していない」として、シオニズムへの抵抗感をあらわにしていた。⁴¹このように、シオニスト運動は合衆国ユダヤ人の間では少数派の突出した動きであり、全体として彼等はイスラエル建設に対して消極的、慎重な姿勢であった。このことは、ユダヤ人大学の創設に対しても否定的な動きがむしろ大勢であったこととその発想において通底するものがあるといえるだろう。

また、同じことが逆に、1940年代後半のユダヤ人大学設立への賛同者の中にはシオニストが多かったことから説明される。ブランダイス大学の創設の具体化に際しての中心人物ゴールドスタイン（Israel Goldstein）ラビはシオニストであったし、賛同者となったカレン（Horace M. Kallen）もシオニストであった。⁴²カレンに関して言えば、彼は1920年代のユダヤ人大学設立議論にみられた同化主義、あるいは「るつぼとしてのアメリカ」の対極にあるモデルである文化多元主義を1910年代に提示した人物でもあった。⁴³そうするとここに、ユダヤ人の独自性を強調するものとしてのユダヤ人大学設立の支持と文化多元主義の支持、そして、ユダヤ人大学設立への反対と同化主義の支持のそれぞれが結びつくという二つの流れが確認される。確かに、同化主義やるつぼのアイデアに基づけば、合衆国内における集団としてのユダヤ人は溶解してなくなるべき存在ということになるから、ユダヤ人大学を設立するという考えはむしろ文化多元主義と親和性をもつのであり、るつぼの発想とは相容れない。⁴⁴

以上のように、1920年代におけるユダヤ人大学設立に関する議論には、伝統的〈アメリカ〉の理念である平等や民主主義への期待が再度確認される。そして、その期待の内容とは、総じてるつぼの中で溶けて人種や宗教などの色をなくして「アメリカ人」となった個人個人の機会の平等であって、各集団各集団の文化的価値を平等のものとする文化多元主義や多文化主義の発想

とは異なるものであった。その後1923年1月、ニューマンは寄せられた反響に答える形で再度『ジューイッシュ・トリビューン』に寄稿し、ユダヤ人だけが入学を許可され、教員もユダヤ人のみ、カリキュラムもユダヤ的精神に基づいたものであると誤解を受けやすいという点で「ユダヤ人大学（Jewish University）」という名称は誤称であるといつてよいほど、彼の構想するユダヤ人大学は非ユダヤ人にも開かれた「偉大なる、民主主義の、大衆の組織であり、真の“多くのユダヤ人のための大学”」⁴⁵であることを強調した。ただし、「割当制」という差別への対抗策として打ち出された観の強い1920年代のユダヤ人大学設立の議論は、この時期、これ以上具体的になることはなかった。

3. ブランダイス大学の創設に向けて

以上のようにして1920年代のユダヤ人大学設立の議論はいったん終息した。その後、この動きが再び活発化したのは、ほぼ四半世紀を経た第二次世界大戦後のことであった。本節では、ブランダイス大学設立の経緯と、その際にみられた様々な議論を検討したい。

(1) ミドルセックス大学

1940年代後半のユダヤ人大学設立の議論は、ボストン郊外のウォルサム市にあるミドルセックス大学が授業停止の状態に陥ったことによって俄に本格化した。むろん、1920年代のニューマンによる議論が終息した後、完全にユダヤ人大学設立の議論が途絶えていたわけではなかった。1940年代の初めには、ブネイ・ブリス（B'nai B'rith）の会長であるモンスキー（Henry Monsky）がユダヤ人大学の設立を目指し、全国からメンバーを募って委員会を組織し、中西部にキャンパスの敷地を探したこともあった。しかし、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害などヨーロッパ同胞の窮状は合

衆国のユダヤ人にとってより差し迫った問題となり、大学の設立は議論の本格化には至らなかったのである。⁴⁶

ミドルセックス大学はメディカル・スクールと獣医学部を擁する比較的小規模な大学であったが、もとよりメディカル・スクールを巡ってはトラブルが絶えなかった。米国医師会（American Medical Association）の許可が得られず、同校の卒業生はマサチューセッツ州以外の医師試験を受験することができなかつたのである。さらに1944年、マサチューセッツ州は、「臨床設備、教員、資金力の点で改善の必要がある」として、同州における医師試験の受験資格をも認めないことを決定した。このことは、事実上、学校組織の停止を意味した。1945年秋、ミドルセックス大学は授業を開講することができず、その機能を停止したのであった。

このような、同校に対して妨害的ともいえる措置自体が米国医師会およびその支部であるマサチューセッツ医学協会（Medical Society of Massachusetts）の反ユダヤ主義によるものであるという意見もあった。そもそも、同校にはユダヤ人やカトリック、黒人学生が多く在籍していたのだが、この事態を嫌った医師会はマイノリティ・グループに属する学生が多くを占める学校を排除しようとして少なからぬ圧力をかけていたという。ブランダイス大学の初代学長となったザッハー（Abram L. Sachar）によると、ミドルセックス大学創設者のスミス（John Hall Smith）はメディカル・スクールの入学許可に関して「異端」の信念を持っており、彼自身はプロテスタントであったが人種や宗教に基づいた入学制限を設けることを断固として拒んでいた。そのため、同校は他大学から「割当制」により入学を拒否されたユダヤ人学生の避難所になっていたのだ。471944年時点で学生300人のうち約85%がユダヤ人であった。⁴⁸

ミドルセックス大学の敷地と設備を利用して世俗的ユダヤ人大学を設立する計画は、1946年1月7日、1944年に創設者が亡くなった後に学長職を

引き継いだ息子ラッグルズ・スミス (C. Ruggles Smith) と教養部長のチェスキス (Joseph Cheskis) が、ニューヨークのゴールドスタイン・ラビに一通の手紙を送ったことから始まった。授業停止状態に陥った同校は、初め労働者用の大学の設立を念頭において各方面の労働組合等の指導者にアプローチしていたのだが、交渉は不成功に終わっていた。チェスキスはユダヤ人であったが、彼の知人であり、アメリカ合同衣服労働者組合の総裁であるシュロスバーグ (Joseph Schlossberg) が、ゴールドスタインがユダヤ人大学を設立するキャンパスを探していることをチェスキスに知らせてきたのであった。ゴールドスタインは、合衆国で最も影響力の大きい保守派ユダヤ教会のラビであり、また、これまでも彼自身のシナゴグの他、保守派ユダヤ教の協議会などを組織した経験もあった。1940年代中頃からは、メディカル・スクールの入学における不公正な慣習に憤りを感じ、ニューヨーク市近郊の知人達とともに、差別の問題に取り組むとともにユダヤ的価値に好意的な環境を提供できるような大学を設立する可能性を模索しているところだったのである。

先にも述べたように、ゴールドスタインは熱心なシオニストであり、数々の合衆国におけるシオニスト運動の先頭に立ってきた人物であった。実際、彼がシュロスバーグにユダヤ人大学設立の腹案を示したのは、1945年11月にアトランティックシティで開催されたアメリカ・シオニスト機構 (Zionist Organization of America) 年次大会の休憩中の出来事であった。ユダヤ人という集団への帰属意識の高いゴールドスタインのユダヤ人大学像は、「特別なユダヤ的価値」⁴⁹を持つものであった。彼は、その具体例として、キャンパスにユダヤ教のチャペルを「第一の礼拝の建物」として建設すること、ユダヤ教の安息日、祭日、聖日には授業や試験、学籍登録を行わないこと、学生食堂はユダヤ教の食餌法に従うこと、エルサレムにあるヘブラー・ユニバーシティ・オブ・エルサレムその他のユダヤ人大学

と交換協定を結び活発な交流を行うべきであることなどを挙げていた。⁵⁰ また、大学の役割ということに関しても、世界に発信するユダヤ人文化の中心地ということ強く意識しており、以下のように述べた。

...このような大学はユダヤ人のリーダーシップを形成し発展させるのに重要な手段となり、またアメリカ・ユダヤ人の文化的および知的センターとなるべきである。

...この文化と科学の中心地から、全ての人類に啓発と癒しをもたらし、さらにはユダヤ人の良い名声に与するような人文科学と自然科学における重要な研究の成果を生み出さなければならない。⁵¹

スミスとチェスキスからの手紙にはユダヤ人大学という言葉は使われておらず、ゴールドスタインをメディカル・スクールの再建者として期待していること、現在の設備は無料同然で譲ってよい旨などが書き綴られていた。しかし、ゴールドスタインは手紙を受け取った一週間後の1月15日には早速ミドルセックス大学のキャンパスを訪れている。彼は、財政難により傷んだ建物や内装、手入れがされておらず雑草の伸びたグラウンドとともに、ウォルサム市とチャールズ川を一望できる立地に深い感銘を受け、「このキャンパスは本来的に偉大なるユダヤ人大学の敷地として価値のあるものである」と述べてこの地にユダヤ人大学を設立することを決意したのであった。⁵²

(2) 「割当制」と「アカデミック・ゲッター」に対する懸念

以上のような経緯で、1940年代後半におけるユダヤ人大学の設立は、利用可能な敷地や設備が先に用意された形で、「議論」というよりは具体的「計画」として進行していった。ということは、裏を返せば、この「計画」はユダヤ人大学設立に対する要望が高まった結果として進められたものではなかったのである。確かにこの時期は、第二次世界大戦後の復員軍人援護

法による大学進学希望者の急増とそれに伴う教育施設の不足などにより、1920年代と比べて高等教育自体の機会の拡大に対する要求は高まっていた。にもかかわらず、1920年代と同じく、この時期にも「ユダヤ人の」大学を設立することに対する慎重論や反対意見は多く聞かれたのであった。

筆者の管見の限りでは、ミドルセックス大学を引き継ぎ新大学を設立する、この計画を妨害する動きは確認されなかった。しかし、例えば当初1947年10月予定であった開学が一年遅れたことは、資金集めが順調に行かなかったことが原因のひとつであった。ゴールドスタインは、1946年2月からユダヤ人の名士やユダヤ人団体に呼びかけての資金集めを開始し、同年8月にはアインシュタイン（Albert Einstein）博士の賛同を得てアルバート・アインシュタイン高等教育基金（Albert Einstein Foundation for Higher Learning）を組織して本格的に大学設立に向けての資金調達を試みたのだが、世界的な有名人物の名を以ってしても予定通りに計画は進まなかった。⁵³

ゴールドスタインの回想によると、ユダヤ人大学に対する否定的な意見として、「ゲッター・スクール」になることへの危惧、一流の学生や教員をひき付けられるのかどうかという懐疑など様々な意見があったのだが、その代表は1920年代と同じく、既存の大学における「割当制」や差別に関連したものであった。⁵⁴確かにこの時期、ユダヤ人学生に対する入学差別の存在はニューヨーク州「州立大学の必要性に関する臨時委員会」やニューヨーク市「統合に関する市長の委員会」等による調査により数値的にも証明されつつあったのだが、「一校や二校、あるいは20校ユダヤ人の援助による大学を設立したとしても、大学教育を求めるユダヤ人学生にいかほどの機会を開くというのであろうか」として、ユダヤ人大学の設立が差別の問題の解決になるであろうという期待はほとんどなかった。⁵⁵それどころかむしろ、ユダヤ人は「自分達の学校」に行けばよいとしてユダヤ人学生

の入学を拒否する口実を他の大学に与えることになるのではないかと心配された。

ユダヤ人団体の動向に関していえば、例えばアメリカ・ユダヤ人委員会はユダヤ人大学の設立に対しては消極的であった。同委員会はこの時期、「割当制」が全国的な醜聞となりつつあることを受けて、「ユダヤ人のための高等教育に関する会議（The Conference on Higher Education for Jews）」を組織している。1946年10月11日、12日の両日に行われたこの会議は、教育機関やアメリカ大学協会（Association of American Colleges）などの教育組織が独自で差別への取り組みを行うよう直接的に働きかけること、ニューヨーク州立大学を例として公立の高等教育機関の拡充を支持していくこと、教育の機会の制限を至急廃止すべきことを一般の人々にも直接訴えること、法律の制定を含め政府に対して適切な行動を求めていくことの4点を勧告し、マイノリティの高等教育への入学への障害を取り除くために努力することを確認した。⁵⁶しかし、

世間で非難されている風潮に乗じるのではなく、[アメリカ・ユダヤ人（＝引用者）]委員会はこの問題について初めから改めて調査することに決めた。例えば、ユダヤ人大学を設立しようという提案は他所の組織では賞賛を以って受け入れられた。しかし当委員会は、この計画には、その大学が「ゲッター・ユニバーシティ」になり、他の大学が「割当制」を継続するもっともらしい口実を与えてしまうというような、危険な面があると感じた。⁵⁷

というように、ユダヤ人による自前での世俗的大学の設立、あるいはそのことによる教育の機会の拡大はこの勧告の中には含まれないままとなったのであった。⁵⁸

また、アメリカ・ユダヤ人会議（American Jewish Congress）の発行する雑誌『コンGRESS・ウィークリー』も、疑問を呈する形で同様の意見を

表明した。

この施設の性質が、それを夢見ている本人たちにとってさえいまだ十分にクリアになっていないのである。その大学は、差別を理由に一般の「非宗派」大学に拒絶された若者の必要性に応じるためのものになるべきなのであろうか、そして、ユダヤ人に対する差別がアメリカの学業の世界では「普通の」現象であることを間接的に認めるべきなのであろうか。その大学は、ユダヤ人の資金により支えられた非宗派の大学として機能すべきなのか、あるいは大っぴらにユダヤ人性 (Jewishness) の刻印を抱いたものにするべきなのであろうか。(中略) いずれにせよ、ユダヤ人大学の設立は、ユダヤ人のために何かをしようという一握りのやる気はある素人に扱える事柄ではないのである。その設立を支えるには、深遠な確信と非常に熟慮された判断、そしてこの国における我々の民の歴史の重要性に対する深い意識が必要なのである。⁵⁹

このように、1940年代後半には「割当制」への認識が1920年代以上に強まったにもかかわらず、あるいは強まったからこそ、ユダヤ人大学設立に対する否定的な意見は根強く残ったのであった。

最も危惧されたのは、ユダヤ人大学を設立する際にそれが「割当制」への対処として設立されるのであれば、他大学に拒否されたユダヤ人学生の集まる「アカデミック・ゲッター」になってしまうということであった。前述したように、シオニスト運動の支持者であるということから考えてもゴールドスタインはメルティング・ポットよりはむしろ文化多元主義的な発想を好んだと思われる。実際、彼はユダヤ人大学設立への反対意見に対して「ユダヤ人のアイデンティティを感じさせるものの存在には何でも不快感を示すユダヤ人からの反対であり、彼等は保護色の中にいることに救済を見出すのである。彼等にとって、メルティング・ポットの均一性がオー

ケストラの多様性よりも心地よいアメリカの民主主義のシンボルなのである」⁶⁰と述べ、それを「論理で説得する類のものではない感情的なレベルのもの」⁶¹と、さして重要視しない姿勢を示しさえしている。しかし、「割当制」の存在を前にしては、ユダヤ人大学の設立は合衆国における集合的なユダヤ人の存在を浮き上がらせる しかも、ネガティブな形で こともまた事実であった。

(3) ユダヤ人大学正当化の論理

ゴールドスタイン・ラビのスピーチより

かかる事態に、ゴールドスタイン、あるいは彼の支持者はどのように折り合いをつけたのか。本項では、依然として大学設立への抵抗感が強いユダヤ人たちに対し、ゴールドスタインがどのような説明を与え、支持や資金を得ようとしたのかその論理を探りたい。具体的には、1946年6月16日、ゴールドスタインはシカゴで開催された全国コミュニティ関係諮問会議（National Community Relations Advisory Council）のユダヤ人大学に関する部会のパネルディスカッションに招かれたのであるが、その際の彼のスピーチを分析することとする。

この会議は、アメリカ・ユダヤ人委員会、アメリカ・ユダヤ人会議、ブネイ・ブリスおよびユダヤ人労働委員会（Jewish Labor Committee）など約20のユダヤ人団体の代表者から構成される会議であり、合衆国のユダヤ人コミュニティを最も広い範囲で代表している組織であった。既に1946年2月頃からボストン、ニューヨークを中心に大学設立に対する支持者集めの活動を開始していたゴールドスタインにとって、この会議は、ユダヤ人の全国レベルの指導者たちに彼の計画のコンセプトを表明できる最初の重要な機会だった。しかしながら、この会議はユダヤ人大学の設立について話し合うものであり、ゴールドスタインの計画を支援するために企画され

たものということでは決してなかった。例えば、ディスカッションの際のゴールドスタイン以外のパネラーは、イエシバ大学大学院主事ハースタイン(Jacob I. Harstein)とシカゴ大学社会学教授ワース(Louis Wirth)であったが、ワースはあらゆるタイプのユダヤ人大学に反対であると表明していた。

冒頭、会議に招待されたことへの謝辞を述べた後にゴールドスタインが切り出したのは、合衆国の高等教育界における宗教系大学の普遍性であった。

それは、例外というより、むしろ通例なのです。恐らく1ダースのクエーカーの大学、20校のカトリック大学、100校のメソジスト、バプテスト、ルター派、監督派、長老派の支援による大学があるでしょう。一校あるいはそれ以上のユダヤ人の支援による大学があったとしても、それは全くアメリカのパターンに沿うものであり、これまでの例から分かるように、非ユダヤ人のコミュニティも当然のこととして受け入れるであります。⁶²

このように、ユダヤ人大学を他の宗教系大学と同じ種類のものと位置付け、「被差別者」グループのユダヤ人というマイナスのイメージを取り払ったうえで、ゴールドスタインは本題に入った。ユダヤ人大学設立に関して人々の心の中にある疑念を晴らすためにお話をさせて頂きたい、彼は言った。

ひとつは、人種と宗教の理由に基づいた割当制という悪にどう対応するかです。(中略)言うまでもなく、それを撲滅するためにはあらゆる努力がなされなければなりません。それは例えば、割当制をおこなっている機関を公衆の批判にさらすであるとか、裁判所は認めないであろうけれどもそれらの機関の免税措置を取り除くように訴えるとか、さらに多くの州立大学設立の構想を練るとか、そういうことです。アメリカ人として、我々は高等教育の領域から非アメリカ的な方針を取

り除く努力をする権利と義務があるのです。しかし、その努力がどの程度成功するのか、あるいはどのくらいの時間がかかるのかは全く分かりません。(中略)

少なくとも、私が代表をつとめる光栄を有しているユダヤ人の支援による大学を支持している人々は、学生や教員をユダヤ人に限定することは提案していないのです。提案しているのは、学生と教員を選抜する唯一の基準を能力にする、非割当の大学 (non-quota university) なのです。⁶³

ゴールドスタインは「割当制」とユダヤ人大学の関連について、さらに次のように述べた。

もし、いまだユダヤ人大学のアイデアを支持することに対する(＝引用者)精神的な留保が残っているのなら、反対の意見よりも賛成の意見、すなわち、他の宗派大学の例と同じであれば生ずるであろう恩恵を重要視して欲しいのです。それは、ユダヤ人の援助による大学は非割当 (non-quota) の大学であるから、我々の割当制とのたたかいはこのような機関の存在によって強力な武器を得るであろうということを知らしめることの価値、そして、また、ユダヤ人大学のアメリカの高等教育への貢献によって強化されたユダヤ人グループの威厳といったものであります。⁶⁴

すなわちゴールドスタインは、ユダヤ人大学を「割当制」への対処として設立するのではなく、それを「行わない」ことで積極的に民主主義や機会の平等の範を垂れることを提案したのであった。さらに彼は、ユダヤ人大学が設立されると否応なくユダヤ人という「集団」が意識されることについては、ユダヤ人「グループ」(Jewish group)という言葉を使い次のように述べた。

なぜユダヤ人グループが唯一、この分野でのグループとしての提供を

差し控えなければならぬのでしょうか。個人のユダヤ人は他の大学に大いに提供していますが、それはユダヤ人グループとして行われないう限り、ユダヤ人の貢献とは理解されないのです。そこで再び、他のグループに参考になる例が見つかるのです。(中略) ハバフォードやスワスマアにおけるクエーカー教徒の大学、シカゴにおけるバプテストの大学、そしてカトリックによるノートルダム大学こそが、これらのグループがアメリカの教育に貢献したということをも最も強く印象付けるのです。ユダヤ人グループの場合も同様です。(中略)

このアプローチの観点からすると、ユダヤ人の支援による大学は、たとえユダヤ人の若者がアメリカの高等教育機関に入るのを難しくしている割当制がないとしても、あるいは州立の大学が現在より広く行き渡ったとしても、重要でかつ久しく待望されている事業であるといえます。このようなユダヤ人の支援による大学は、知的、職業的に準備の行き届いたアメリカの若者を育てる責任におけるユダヤ人の威厳とユダヤ人の参加という問題に関して、重要で機熟したものなのです。(中略) 主にユダヤ人の資金でまかなわれ、レベルの高い民主主義的な方法で運営される大学は、最も印象的にアメリカのユダヤ人がいかに信頼に足るかを示すのに寄与するのです。⁶⁵

このようにゴールドスタインは、ユダヤ人学生の隔離(segregation)やゲットト化という懸念について、再度、他宗派の大学を引き合いに出して合衆国における下位グループの存在を正当化したうえで、大学の設立はそのグループを合衆国の民主主義に貢献するグループとして印象付けると主張したのであった。

そして、このような貢献、また非ユダヤ人の学生にとっても魅力のある大学をつくるための具体的な手がかりとして、ゴールドスタインは、新大学を学問的に高いレベルを誇るものにする所存であることを説いた。

仮の例を挙げさせてください。もし、アインシュタイン教授が数学と物理、モリス・コーエン教授が哲学、アルヴィン・ジョンソン教授が社会科学を教えたら、クリスチヤンの学生に事欠くことはないでしょう。(中略)第一級の教員が全ての人種と宗教の第一級の学生を引き寄せるのです。⁶⁶

さらに同様の例として、当初は受け入れられなかったユダヤ人病院がその「非宗教的キャラクターと基準の高さゆえ」に現在では非ユダヤ人にも広く受け入れられていることを挙げている。⁶⁷

最後にゴールドスタインは、構想されている新しい大学は「割当制」を行わないことを再び強調して演説を終わっている。

ユダヤ人の少年は、入学願書にこう書くのです。「私は、私達の民(our people)に属する非割当の大学に行きたいのです」と。このシンプルな申し立てに我々がやろうとしていることの真髓が含まれているのです。これは、誇りと威厳においてユダヤ人のアメリカの教育への貢献となるでしょう。それは(中略)ユダヤ人が慈善の分野で示したように、機会の平等というアメリカの民主主義の原則が高等教育の分野にあてはまるということを示すことになるでしょう。⁶⁸

(4) ユダヤ人大学設立への賛同と支持

翌17日、全国コミュニティ関係諮問会議の総会が行われた。ユダヤ人大学については以下のように決議された。

総会は、人種、肌の色、信条にかかわらず全ての人に開かれたユダヤ人大学、およびユダヤ人の援助のもとにある高等教育機関を合衆国内に設立し、拡大する最近の動きを満足をもって承認する。我々が思うに、これらの努力はこの国のユダヤ人コミュニティの文化的、知的発展あるいはアメリカン・ライフ一般にとっての重要な貢献となるで

あろう。⁶⁹

このように、「ユダヤ人のリーダーシップを形成」あるいは「アメリカ・ユダヤ人の文化のおよび知的センター」という当初の構想では賛同が得られないことを理解したゴールドスタインは、「ユダヤ人」大学の設立という、集団としてのユダヤ人の存在を浮き立たせざるを得ない計画に対し、彼等が苦しんできた「割当制」を行わないというポジティブな要素を強く打ち出すことで、ユダヤ人諸団体からの支持を得たのであった。後年彼は、この総会を「それは重要な勝利であった 我々のプロジェクトに対するユダヤ人の世論を勝ち取るための根気強い苦闘の頂点であり、また、アメリカ・ユダヤ人のコミュニティからこの計画を圧倒的に受け入れられるための十分な予兆となり、道を開くものであった」⁷⁰と回想している。

ユダヤ人大学設立のスポンサーあるいは支持者になった人々の中には、ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチのジョンソン（Alvin Johnson）や先に述べたカレン、ユダヤ教再建主義者のカプラン（Mordecai Kaplan）、作家のルーイゾン（Ludwig Lewisohn）のほか、ワイズ（Stephen Samuel Wise）ラビやニューマン・ラビといった著名人の名前もあった。その後ゴールドスタインが資金集めパーティに非ユダヤ人を呼ぶかどうかを巡ってアインシュタインと反目し、アインシュタイン高等教育基金の総裁を辞任するなどの紆余曲折はあったものの、計画は残された人々によって遂行された。⁷¹その間、設立される新大学は人種、宗教にかかわらず学生を受け入れ、「割当」を行わないという方針は変更されることはなかった。⁷²

結びにかえて

本稿では、合衆国における世俗的ユダヤ人大学設立に関する議論を、1920年代、1940年代と考察してきた。そもそも、他大学における「割当制」や

差別をかえって固定化するのではないかとの心配から、大学への進学意欲の極めて高いユダヤ人においても、ラビ養成機関以外の世俗的ユダヤ人大学の設立については否定的、消極的な意見が多かった。そのことには、移民や非キリスト教徒、非白人といった主流のワスプ以外の人々を異邦人、異人種として忌み嫌い、彼等がその特性や独自性を失ってワスプに同化することを求めている時代風潮も作用していた。殊に1920年代には、100%アメリカニズム、1924年移民制限法制定への流れなど、不寛容な雰囲気は強く、「多様性」はプラスのイメージを持つ言葉では決してなかった。そのような状況においては、ユダヤ人の集団としての存在や独自性を強調することになるユダヤ人大学の設立は、ユダヤ人の隔離、あるいは「ゲッター・ユニバーシティ」としてユダヤ人が孤立することを意味したのであった。

1948年に開学したブランダイス大学の場合、ゴールドスタイン・ラビを中心とした設立の計画者らは、同大学ではユダヤ人大学ではあるが入学者をユダヤ人に限定したり優先したりということをしない人種・宗教上の平等の方針を表明した。「割当制」も行わず、願書には人種、宗教、出身国についての質問項目も設けないという方針である。その点では、1920年代にユダヤ人大学の設立を訴えたニューマン・ラビも学生として非ユダヤ人も受け入れることを構想していたのであるが、ブランダイス大学は「非割当」の大学として合衆国の機会の平等や民主主義に貢献することをより強く訴えた。このことが、敷地や設備の提供があったことや第二次世界大戦後の高等教育の拡大・大衆化と重なり、ユダヤ人たちの大学設立への支持と賛同を集め、結果、その実現を近づけたといえる。

世俗的ユダヤ人大学設立を巡る議論には、「割当制」撤廃を求める議論と同じく、個人が人種・宗教といったグループ属性から解放され、「色のない」一志願者として扱われることへのユダヤ人たちの思いが反映されて

アメリカ・ユダヤ人の「平等」観と「るつぼ」 世俗的ユダヤ人大学の創設をめぐる議論から

いた。それはすなわち、カラー・ブラインドな入学選抜、あるいはそれをアメリカ社会の統合モデルに当てはめれば、多数のエスニック・グループの永続的存在を前提としない、「るつぼ」社会を求めるものであった。ブランドイス大学の学生募集方針は、カラー・コンシャス（color conscious＝人種、肌の色等の違いを意識した）な行為であるはずの「ユダヤ人」大学の設置とユダヤ人のカラー・ブラインドの理想を理論的に整合させようとする試みであった。同大学は、合衆国におけるユダヤ人の象徴としてではなく、「るつぼ」の象徴として設立されたのである。

なお、以上の議論と逆方向の作用として、その後、「非割当」のブランドイス大学の設立が「割当制」廃止を訴えるユダヤ人たちの運動を力づけるものになったことが、反名誉毀損同盟（Anti-Defamation League of B'nai B'rith）の次の資料から読み取れる。その部分を引用して、本稿を終えることとしたい。

割当は消えうせるべきである。我々は前進しているところなのだ。我々は、ウェルズリーの願書はもう志願者の人種、宗教、信条、肌の色に関する情報を問わないという発表を歓迎している。我々は、新しいブランドイス大学とその哲学および包括性（inclusiveness）そして優秀さのみに基づいた入学者選抜を保證するテクニックを提示している入学願書を歓迎している。⁷³

¹ 拙稿「アメリカ合衆国の高等教育機関における『割当制』廃止運動とユダヤ人団体 1948年ニューヨーク州公正教育実施法を中心に」、『歴史学研究』第800号、2005年4月、19-35頁。

² Harold Wechsler, “Anti-Semitism in the Academy: Jewish Learning in American Universities, 1914-1939,” *American Jewish Archives*, Spring/Summer, 1990; Paul Ritterband and Harold S. Wechsler, *Jewish Learning in American Universities: The First Century*, Bloomington: Indiana Univ. Press, 1994.

³ 羽田積男「ユダヤ系アメリカ人と大学の創設」『教育学雑誌』第28号、1994年。

⁴ Israel Goldstein, *Brandeis University: Chapter of Its Founding*, New York: Bloch Publishing Company, 1951, p.1.

⁵ 羽田積男「アメリカ型大学の創設とその教育 ユダヤ系の大学を中心として」『研究紀要』（日本大学人文科学研究所）第45号、1993年、205頁。

⁶ 羽田「ユダヤ系アメリカ人と大学の創設」32頁に引用のMorris Jacob Loren, “Hebrew Higher Educational Institutions in the United States, 1830-1975,” Ph.D. Dissertation, Wayne State University, 1976, p.81による。

⁷ Goldstein, p.3.

⁸ *Ibid.*, pp.4-5.

⁹ 拙稿「合衆国の高等教育機関におけるユダヤ人学生『割当制』」、『西洋史学』第193号、1999年6月、45-62頁。

¹⁰ G. Stanley Hall, “A Suggestion for a Jewish University: A Menorah After-Dinner Address,” *Menorah Journal*, vol.3, no.2, Apr. 1917, p.99.

¹¹ *Ibid.*, pp.99-101.

¹² Louis I. Newman, “Is a Jewish University in America Desirable?” *The Jewish Tribune*, Oct. 27, 1922, qtd. in Louis I. Newman, *A Jewish University*

in America?: With a Symposium of Opinions by Educators, Editors and Publishers, and a Bibliography on the Jewish Question in American Colleges, New York: Bloch Publishing Company, 1923, p.9.

¹³ *Ibid.*, p.9.

¹⁴ *Ibid.*, p.11.

¹⁵ *Ibid.*, p.12.

¹⁶ *Ibid.*, p.13.

¹⁷ Stephen Steinberg, *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America*, 3rd ed., Boston: Beacon Press, 2001 [1981] p.227.

¹⁸ Newman, "Is a Jewish University in America Desirable?" p.16.

¹⁹ *Ibid.*, pp.16-17.

²⁰ *Ibid.*, p.17.

²¹ *Ibid.*, p.17.

²² *Ibid.*, p.18.

²³ *Ibid.*, p.18.

²⁴ *Ibid.*, p.19.

²⁵ *Ibid.*, pp.18-20.

²⁶ *Ibid.*, p.16.

²⁷ *Ibid.*, p.20.

²⁸ "For a Jewish University: Rabbi Newman Says Exclusion Policy of Colleges May Force It," *The New York Times*, Dec. 4, 1922, p.16.

²⁹ Henry C. King, President, Oberlin College, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.29.

³⁰ Paul M. Warburg, Former Member, Federal Reserve Board, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.31.

³¹ Editorial, "Is a Jewish University Desirable?" *Jewish Tribune*, Oct. 27,

1922, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.21.

³² *Ibid.*, pp.21-22.

³³ George S. Davis, President, Hunter College, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.25.

³⁴ W. O. Thompson, President, The Ohio State University, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.27.

³⁵ Walter Dill Scott, President, Northwestern University, (by his Secretary) qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.29.

³⁶ Julius Hochfelder, *Jewish Tribune*, Dec. 8, 1922, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.46.

³⁷ Murray Manesse, *Jewish Tribune*, Dec. 22, 1922, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* pp.50-51.

³⁸ Stephen G. Rich, *New York Times*, Dec. 10, 1922, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* pp.32-34.

³⁹ A. P. Schoolman, *Jewish Tribune*, Nov. 24, 1922, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.48.

⁴⁰ 池田有日子「アメリカにおけるシオニズムの論理 ルイス・ブランダイスに関する考察を通じて」『政治研究』(九州大学政治研究会)第51号、2004年3月、69頁。

⁴¹ 同上、69-70頁。

⁴² また、ブランダイスもシオニスト運動指導者でありカレンとも親交があったのだが、彼自身は1941年に死亡しており、大学名に彼の名を使用することはゴールドスタインの希望とブランダイスの遺族の了解によるものである。ブランダイス自身がユダヤ人大学の設立に対してどのような考えを持っていたのかに関しては不明である。Goldstein, pp.79-82.

⁴³ Horace M. Kallen, "Democracy versus the Melting Pot: A Study of Amer-

アメリカ・ユダヤ人の「平等」観と「るつぼ」 世俗的ユダヤ人大学の創設をめぐる議論から

ican Nationality,” *The Nation*, vol.100, no, 2590, Feb. 18, 1915(Part 1),
vol.100, no.2591, Feb. 25, 1915 (Part 2)

⁴⁴ なお、既にこの時期に、少数派ではあるが「るつぼとしてのアメリカ」観に疑問を投げかけ、文化多元主義支持の立場からユダヤ人大学の設立に賛成する声もあった。以下に、左翼的傾向のある小説家フランク (Waldo Frank) による意見を紹介しておきたい。「我々のそれ[ユダヤ人大学 (= 引用者)]への態度は、我々のアメリカやアメリカニズムの概念次第である。もし我々がいまだにメルティング・ポットを信じているのであればユダヤ人大学は望ましくない。しかし、我々はそう信じているのであろうか。(中略) アメリカにやってきたエスニックあるいは文化的な全ての要素が一つの均質なアマルガムに燃えきって溶け入るというアメリカの理想は、実際には、これらの要素すべてが最も支配的なアングロ・サクソンの旋律の中の短音階の和音として消え入るよという植民地時代の指令を覆い隠す覆面なのである。」Waldo Frank, Author, “Our America,” “The Dark Mother,” “Rahab,” “City Block,” etc. qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* pp.40-41.

⁴⁵ Louis I. Newman, “The Progress of the Jewish University Idea: A Ral-lying Center for a Creative Jewish Intelligentsia,” Amplified from an Article in the *Jewish Tribune*, Jan. 12, 1923, qtd. in Newman, *A Jewish University in America?* p.72.

⁴⁶ Abram L. Sachar, *Brandeis University: A Host at Last*, Hanover, NH: Brandeis Univ. Press, 1995, pp.9-10.

⁴⁷ Sachar, p.11.

⁴⁸ Goldstein, p.14.

⁴⁹ *Ibid.*, p.10.

⁵⁰ *Ibid.*

⁵¹ *Ibid.*, pp.10-11.

⁵² *Ibid.*, p.20. なお、実際には、設備面の都合およびゴールドスタイン自身の希望により、1948年にはメディカル・スクールではなくリベラルアーツ・カレッジとして開学した。

⁵³ Goldstein, p.92. ユダヤ人大学設立に必要な資金は大学院とプロフェッショナル・スクールに必要な経費を除いて600万ドルとされた。

⁵⁴ *Ibid.*, p.48.

⁵⁵ Sachar, p.9.

⁵⁶ Nathan Schachner, *The Price of Liberty: A History of The American Jewish Committee*, New York: The American Jewish Committee, 1948, pp.181-183.

⁵⁷ *Ibid.*, p.181.

⁵⁸ アメリカ・ユダヤ人委員会は、その後「ユダヤ人のための高等教育に関する会議」の中に「ユダヤ人大学に関する小委員会」を設け、ブランドイス大学設立に向けての動きを観察していた。(Memorandum on “the Jewish University,” Prepared for Subcommittee on the Jewish University of the Conference on Higher Education for Jews by Edward N. Saveth, The American Jewish Committee, Apr. 3, 1947, revised Dec. 9, 1947.)

⁵⁹ *Congress Weekly*, April 5, 1946, qtd. in Goldstein, p.53.

⁶⁰ Goldstein, p.8.

⁶¹ *Ibid.*

⁶² Address delivered by Dr. Israel Goldstein before National Community Relations Advisory Council Chicago, June 16, 1946, qtd. in Goldstein, p.126.

⁶³ *Ibid.*, pp.127-128.

⁶⁴ *Ibid.*, p.131.

⁶⁵ *Ibid.*, pp.128-129.

⁶⁶ *Ibid.*, p.130.

⁶⁷ *Ibid.*, pp.130-131.

⁶⁸ *Ibid.*, p.133.

⁶⁹ Goldstein, p.58.

⁷⁰ *Ibid.*

⁷¹ ゴールドスタインが著名なキリスト教の聖職者を招待したことに憤慨したアインシュタインが、基金を辞し、今後、彼の名前を使用することを許さないと通告してきたため、アインシュタインの残留を望んだゴールドスタインが混乱を避けるために辞任した。基金の後継総裁らとゴールドスタインの関係はその後も良好であった。Goldstein, pp.97-98.

⁷² ブランダイス大学が学生・教員の人種・宗教を一切問わないことは、開学前後に行われたレセプションでのスピーチや発行されたパンフレットなどでも再三に渡り強調された。(*Brandeis University, The Challenge, The Assurance, The Pledge*. Text of the addresses at the dinner and reception in honor of Dr. Abram Leon Sachar, first President of Brandeis University, June 14, 1948, Hotel Statler, Boston as broadcast over the ABC network; *Questions and Answers about Brandeis University*, issued by the Albert Einstein Foundation Inc., n.d., Brandeis University file, American Jewish Committee Blaustein Library.)

⁷³ Edward J. Sparling, *Civil Rights: Barometer of Democracy*, Freedom Pamphlet Series, Anti-Defamation League of B'nai B'rith, 1949, p.29.

付記 1) 本稿は平成17～19年度科学研究費補助金・若手研究 (B) 「合衆国の人種差別撤廃におけるユダヤ系アメリカ人の活動に関する研究」の成果の一部である。

付記 2) 本稿を、32年9ヶ月の長きにわたって北九州市立大学外国語学部のためにご尽力下さった、敬愛する故野田修先生に捧げる。先生の北九大

北 美 幸

へのご着任と筆者の生まれ年は一年と離れておらず、よく「親子みたい」と言われた日々の思い出は私の宝物である。